

村は掌中に

S・R・ハルノート作

坂田貞二 訳・解説

凡例

「」内は、訳者による読み下しの補足・註記。

同じ人物を示すにあたり、固有名詞と代名詞の使い分けは、原文を尊重した。

原文は、一段落がかなり長い。それは作者の意図によると理解して、尊重した。

作者紹介（作品掲載書の紹介要旨）

一九五五年に「ヒマラーヤ山系の麓の」ヒマーチャル・プラデ

ーシユ州のある村に生まれ、短編集や小説を多数出版。

現在は、ヒマーチャル・プラデーシユ州の観光公社の役職職員。

編者による作品解説

ハルノートのこの作品には、美しい山並みと溪谷の息吹が感じられる一方で、人間の醜悪な姿も見えてくる。

この短編では、山岳地帯の女性の渴望・貧困、権威・権力との戦い、男性支配の重圧などが、読む者に重くのしかかってくる。

マンガリーは朝から忙しかった。足は地面に着かず、宙に舞いあがっていた。家も中庭も牛小屋も、息子がお嫁さんを連れてくるのを迎えるときみたいに、きれいに掃除して飾りたてていた。

彼女は朝はやく起きて、まずは井戸に水汲みに行こうと水瓶を持ちあげた。急に腹が立った。壺屋が、「新しい土器を使う季節なのに」水瓶や大甕をまだ届けてきていない。でも、取りに行く暇はない。家の中と外を掃除し、小さいながらも畑の仕事をし、家畜にやる草も取ってくる——こういうことをみんな、女手一つでしなければならぬのだから。夫婦が汗水

たらしめて働き、石だらけの草地を開墾して、三・四枚の畑を作った。「山岳地帯のここでも」温い半年は穀物が採れる。畑はそれだけあれば十分だ。けれど、お金に困って畑を手放すことになった。娘二人を嫁がせるときに「持参品のために」村長（むらおき）から借金して、畑を担保に取られてしまったのだ。息子がいれば、「頼りになるし、嫁さんからの持参品も入って、」事情は違ってきたはずだ。夫のモーティーに、「わたしに男の子が授からないから、みながしているように」もう一人の奥さんを迎えなさいよ」と何回も勧めたけれど、モーティーは、「娘が授かったのだから、これでよかるうよ。神さまが定められた運命を人間が変えるわけにはゆかんさ」と言っていた。モーティーは酒を飲まない、トランプ博打もしない、夜遊びもしない。根っからの働き者だ。けれど一つだけマングリーが嫌なことがある。モーティーは暇さえあれば、村長の家に入り浸っているのだ。マングリーは、村長の顔を見るのも嫌だ。上の娘を嫁に出すときに金を借りたし、ほかのことも借金している。けれど好意で金を貸してくれているのでなく、畑の名義をみんな書き替えてのうえなのだ。マングリーには、モーティーがいくら働いても借金を返せないことがわかっていて。人妻のマングリーは、村長にジロジロ見られ、多少は厭らしいことをされても我慢している。それもみんな、モーティーが村長に酷い目に遭わされないようにと思つてのことだ。さもなければ、あんな奴、鎌で切りつけてやりたいくらいだ。

モーティーは、粘土を扱う職人として腕がよい。土で家を建てることで、モーティーほどの職人は近辺にいない。それにモーティーは、この物価高のご時世でも二十五ルピー以上の日当を受けとらない。ほかの職人は、いくら稼いでも足りないからと、高い日当を取る。モーティーは村長に借金があり、ほかからも借金がある。その利息も払わねばならないのだが。

こういう借金だって、モーティーは自分のためにしたのではない。もとは大きな家族で、弟が三人いた。三人に所帯を持たせてやった。嫁さんたちは、モーティーとマングリーが邪魔になってきて、一つ屋根の下に住むのを嫌うようになった。とうとう分家して、畑も弟たちに分けてやることになった。それでモーティーは、すっかり老けこんでしまった。弟たちはみんなよい暮らしをしている。けれどモーティーはいま、弟たちに所帯を

持たせたときの借金でくたびれ果てている。

マンガリーは古くなって壊れそうな水瓶を片手でつかみ、戸口に置いた藁のクッションを暗いなかで探した。クッションを頭に置き、そのうえに水壺をひよいと載せた。マンガリーは頭に載せた水壺を、それが空だろうと水がいっぱいだろうと、手を添えないで運べるから両手が空いている。マンガリーは外に出た。戸を閉めて出かけた。いつものように、「安い葉っぱ巻き煙草」ビリーに火をつける。一人でやってゆくには、これだけが楽しみだ。煙草を吸いながら、水を汲みに行った。毎朝五・六回は、壺で水を汲んでこなければならぬ。途中であれこれ考えた。

彼女はきょう特別に、牛小舎のところに水壺を一つ置いといた。モーテイーがジャージー種の雌牛を連れてくるはずなのだ。彼女は水を汲んでくると、家に入らないでまっすぐ牛小舎に行った。山地の雌牛が二頭、雌羊が三頭、「犁を曳かせる」山地の雄牛「二頭」一組がいる。「けれど山地の小さい雌牛では、そうは牛乳を搾れない。もう何カ月も、牛乳を飲んでいないしバターも食べていない。よその家に牛乳やヨーグルトを貰いに行くのは嫌だ。家の牛からたくさん牛乳が出ているときにみんなに上げていたのだから、行けば「どうぞ」とくれるに決まっているけれど、そんなことをしたくない。

牛小舎は二つの部屋に分かれている。藁ぶき屋根が壊れかけている。何回もモーテイーに直してよと言ったけれど、そんな暇があるはずがない。長い藁を草地にとってあるのは、牛小舎の屋根を直すためなのだ。こんなことを考えながら彼女は、だいぶ長いこと牛の糞を片づけてないことに気が付いた。きょうの彼女はちがう、手足に電流が流れているみたいにキビキビと仕事を進めている。

牛小屋のもう一方の部屋を片付け、羊を手前の部屋に移した。牛を繋ぐ杭は、村の若者に作らせておいた。問題は、それをどうやって打ちこむかだ。牛はしばらく外に繋いでおいて、モーテイーに杭を打ちこんでもらえばよいと思った。そこで彼女はきれいに掃除して、牛が座れるように新しい藁を敷いた。青い葉とゆうべ残しておいたお焼きを飼葉桶に入れ、水と

塩を足して牛がいつでも食べられるようにした。

そのとき急に呼びかけられたので、彼女は「ああ、来たのかしら」と外を見やった。村のおばさんだった、「ねえ、旦那はまだ戻っていないの？」
マングリーは笑みを返しただけで、なにも言わなかった。

「いいわねえ、たっぷり牛乳が出るジャージー種がくるのだから」
マングリーはそれにも笑みで答えた。

おばさんは帰りかけた。呼びとめて言った、「ビーリーで一服しない？」
おばさんは振りかえった。手には鎌と縄を持っていた。牛の草を採りに行くところらしい。マングリーはポケットから取り出したビーリーに火をつけて、おばさんに渡した。自分のにも火をつけた。二人は牛小屋の裏手に座った。

「ねえおばさん、あたし、ジャージーを飼ったことがないので、どう世話したらよいのかわからないのよ」

「べつに難くないわ。水牛を飼っているわよね。水牛もジャージーも同じよ」

「それで、牛乳はどのくらい出るの？」

「一回に五キロは出るはずよ、よく育てていればね。でも、あなたの旦那がどういふのを買ってくるかしだいよ。それに、村長もいっしょに行っているのでしょうか？ あたし、心配だわ、変なのを高く売りつけられないかって」

「そうね、村長がワルなのはみんな知っているものねえ」

おばさんは草を採りに行った。マングリーは、一回で五キロと聞いて、考えこんだ。朝と晩の二回で十キロになる。牛乳に乳酸菌をまぜておいたのを攪拌する「こと」でヨーグルトを作るにも、その「壺がない。そう、去年の穀物を貯蔵するとき壺屋から買ったのが、家に吊るしてある、と想いだした。マングリーはすぐにそれを下した。水を入れてきれいに洗い、逆さに置いて水を切った。これで牛乳を入れられる。

家も小さい。大きい目の部屋が一つ、あとは台所だけだ。屋根が古くなっ

ていて、大雨のときは雨漏りする。小さい古瓦を並べただけの屋根だからだ。いまだき瓦屋根の家などこの村にはない。どこもスレート葺きになっている。村はかなり大きいけれど、「不可触民とされる」ハリジャンはマンガリーの家だけ。あとはみんな、「王族の子孫と称する富農層」ラージプーと「儀礼を司るのが昔からの仕事で、地主の多い」バラモンだ。最近では少し離れたところに何軒か、「動物の死体を片づけるのが伝統的な仕事で、ハリジャンの」チャマールの家もある。村長が少しずつ畑地を分けてやったのだ。村長がなぜそうしたのか、マンガリーにはわかつていない。「指定カーストの」ハリジャンには、政府からかなりの助成がある。婦人会の集まりでそう聞いている。マンガリーは四十五歳を過ぎて、読み書きを習った。あと二年で五十になる。村の学校の先生が文盲の人に教えてくれるので、彼女も通ったのだ。モーティーはそれを嫌って、「女は家事をしていればいいんだ」と文句を言った。

彼女はそう言われて、言いかえした。「あんたはいい歳をしているのに、なにもしないから黒くて汚い水牛みたいじゃないの。あたしが読み書きを習いはじめたら、文句をつけるのよね。馬鹿みたいよ、あんたは。いくつになっても、読み書きは習えるのよ。あたしはあんたみたいに頭が固くないわ」

マンガリーは、言ったことを見事にやりとげた。婦人会の集まりにいつも行って、相談事でみんなが驚くような名案を出すこともあった。村の婦人たちはそれで、マンガリーが婦人会の会長になってくれればよいと言った。けれど彼女はその話に乗らないで、「あたしなんかもう年寄りだから、学校に通った若いお嫁さんたちのだれかになってもらいましようよ」と答えた。

そう言いながらも、このごろの若い衆が村のために働く気がないことも知っている。みんなバラバラなのだ。なんてひどい村になってしまったのだらうと、彼女は村の若い衆のことを不満に思っている。昔のような協力・協調なんてなくなっていて、いっしょに座ってちよっとお喋りすることもない。お喋りしながら援けあっていれば、つまらないことで衝突しないで済むのに。だれかが亡くなったらみんな焼場に行き、道の草取りをするときは

どの家からも女が出るし、とうもろこしの採りいれるときは賑やかに歌い踊っていたのに。そういうときマンダリーは、歌に夢中でいつの間にか採りいれが終わっていたものだ。婚礼となれば、一週間も村中の人が祝い唄で沸きたっていたものだ。唄が上手なマンダリーは、婚礼のたびに祝い唄や花婿の乗る馬を迎える唄を歌っていた。祝いの踊りが夜通し続いていた。それがいまでは、なにもなくて淋しいものだ。

陽が傾いてきたが、彼女は気づかなかつた。牛小屋に座って、モーティーの帰りをじっと待っていたのだ。想像するだけで胸がドキドキした、ジャージー牛とその仔牛を追いながらモーティーが戻ってきたら、走りよつてまず仔牛を抱きあげて頬ずりし、母牛のお乳をたっぷり飲ませてから、仔牛を家の台所に連れて行って、いっしょにいよう。

そのとき、モーティーの姿が目に入った。嬉しくて飛びあがりそうになった。けれどよく見るとモーティーが一人でやってくるので、驚いた。ガーンと殴られたような気持だ。一瞬、どうしたのだろうとあれこれ思いをめぐらせた。ジャージー種の雌牛を買ったものの、トラックに乗せたときに怖がって暴れたので降したのか、なにか事故でも起きたのか、それとも――。彼女は震えあがった、亭主が村長に騙されたのではないか？

彼女は気を取りなおした。こちらにやってくるモーティーは、疲れはてているようだ。いったいどうなっているの？ などと問いつめようものなら、亭主が怒るだろうと思って、ぐっとこらえた。マンダリーだって、帰ってきたばかりの亭主にガミガミ言うほど愚かではない。彼女はすぐに家に入って、鍋を火にかけ、野菜と黒糖を入れた。それから煙管を亭主のほうに運び、煙草を詰めた。

それでモーティーが一息ついたので、我慢できなくなって訊ねた、「雌牛はどうしたの？」

煙管を吸いこむ音、水煙管がブクブクと立てる音で、マンダリーの声が消されそうだ。彼女は眉をつりあげた、「あんた、なんで答えないのよ！」

モーティーは黙っているわけにゆかない。ぼそつと言った、「連れてきたけど、村長の家に繋がれちゃったんだ」

顔を真っ赤にしてマングリーは叫んだ、「どうしてなのよ！」

「雌牛を買いに行つて町で出費がいろいろあつたうえ、まえからの借金もあるから、それを返すまでは預かつておくつて言うのだ」

「あんた馬鹿ねえ。牛は政府からの助成であんたが買ったのでしよう。それなのに村長が預かるなんて。いったいどのくらい出費があつたのよ？」

モーターはしばらく煙管をふかしてから、町であつたことを話しはじめた。

モーターが雌牛を買うことにしたのは、村長の差し金だ。「指定カーストのハリジャンに政府から下りる助成で、雌牛を買えるからと村長が勧めて」モーターに申請書を書かせ、助成認可を取りつけたのだ。そしてある日、村長がやってきて「よい報せだよ。町に行つて雌牛を買つてこよう、助成が一万ルピー貰えることになったのだ。それで、「いままでのおまえさんの借金のうち」五千ルピーをわしに返せばな、残りの五千ルピーは棒引きにしてやるよ」これが村長の策略だ。いっしょに町に行つてやろうと言つて、町での出費は村長が出した。雌牛を助成金で買うための手続きに五日かかった。村長は宿の一室を自分に、もう一室をモーターにとつた。宿は、BDO（地域開発官）の役所に往来しやすいところにとつた。はじめの日に地域開発官の役所で書類を作るとき、お役人さまにお茶とお菓子を、ご馳走し、三日目に銀行から助成金を引きだすときにも担当さんにお茶とお菓子を。夜には村長が、この件を担当するお偉いさんたちを宿に招くので、賑やかな宴会が続いた。モーターは小さくなって自室に籠り、ダール（豆汁）とローティー（お焼き）だけをガツガツ食つた。かれは酒を飲まないから、宴会に加わらない。四日目にジャージー種の雌牛を買いに、町外れの牛飼い部落に行つた。村長が選んで雌牛を買つた。そこで、牛を運ぶトラックが要る。村長が手配し、モーターといっしょに乗りこんだ。村に着くと村長は、町での出費を一つ一つ説明した。出費の合計は、だいたい五千ルピーになる。

モーターは驚くばかりだった。どうしたらそんな大金を払えるのか？もう抵当に入れるものはなにもない。村長が名案を出してこう言つた、「い

いか、モーティー。おまえはわしに借金があるよな、それにおまえはもう年寄りで、抵当に入れる畑も残っていない。畑でもあれば抵当で金を貸せるがな。そこで、こうしないか。この雌牛はわしのところに置く。それで今回の出費分になるし、今年の利息も払える。雌牛はまた、なんとかしてやろうじゃないか」

モーティーはうなだれて家に戻ってきた。どうしようもなかった。マンガリーが言うように、村長はたしかにワルだ。自分と同じような身分の連中のことを想いだした。村長がチャマールたちを村に住まわせるときに、チャマールがいないと「動物の皮を剥いで作る」靴に困るし、死んだ動物を片づけることもできないと言っていた。他所から呼んできたチャマールたちを、村長は自分の都合のいいように使っている。あるチャマールの名義で、助成を受けて製粉所を作り、別のチャマール名義で水牛を買い、ほかの者の名義で土地改良の助成を受けた。村長はどんなことでもするのだ。けれどかれは、村長に立ちむかいようがない。もともと借金で頭が上がりないのだから。

マンガリーはモーティーの話を聞いて、村長の策略がよくわかった。顔が真っ赤になった。モーティーは目を伏せて、煙草がなくなった煙管を啜えている。マンガリーの顔を見られないまま、町でのことを淡々と語ったのだ。

マンガリーは立ちあがった。戸の外を見ると、陽が落ちるところだった。鎌を取りだした。外に出て、石で刃を研いだ。草を刈りに行くのだな、とモーティーは思った。だがマンガリーは、真っすぐ村長の家に行った。中庭に人が大勢いた。近所の子どもたちが、可愛らしいなあという目で雌牛を見ていた。村長のおかみさんが、雌牛の角にバターをつけて磨いていた。村長は牛乳を搾ろうと、バケツを手に中庭の端にきて、マンガリーの姿を見た。バケツが手から落ちそうになった。

彼女は村長に挨拶もせず、顔を真っ赤にしていた。目は血走っていた。そのさまに村長は、地面に釘づけされたみたいで身動きができなかった。犬が後ろからマンガリーに飛びかかった。なにがなんだかわからないまま、

マンガリー振りむきざまに鎌を振るった。犬はその場に倒れた。

「村長、言ってみなよ。あたしの雌牛はどこにいるんだい。」牛は目のまえに繫いであったのだが、マンガリーはわざわざそう訊いたのだ。

「おまえの牛だって？ モーティーが自分で置いていったんだよ。借金がいつぱいあるからってな」

「そんなこと、百も承知だよ。借金だって、あんたが仕組んだのよ、わたしがいつまでもあなたの乞食でいるように。あたしは知ってるんだよ、あなたはワルで、あたしらを食いものにして金を稼いでいるんだ。雌牛を助成金で手に入れようなんて言っておいて、それも取っちゃうんだからね」

彼女はずいと進みでて、繫いである杭から雌牛を解いた。村長のかみさんが止めようとしたが、マンガリーに突きとばされて村長の足許にうつ伏せに倒れこんだ。そのまま起きあがれなかった。「村長面して好き放題やってきたね。ダーヤン（鬼女）だつてときに見逃してくれるのに、あんたときたら情け容赦ないんだ。あんたなんか、ここにいてだけで汚らわしい。唾をかけてやる、ペッ」

村長の顔に唾がかかった。けれどかれは一步も動けなかった。近所の人がかいていたが、離れて眺めているだけだった。マンガリーの形相は、「悪魔を踏みつけて殺す」ドウルガー女神さながらだった。

マンガリーは喚きつづけていた。雌牛の手綱を脇で抑え、仔牛を抱えて家に戻ってきた。後ろから村長のかみさんがすすり泣く声と犬がヒーヒー啼く声が聞こえてくる。雌牛は大人しくついてくる、ずっとまえからの主人と思っっているみたいだ。

家に着くと声をかけた、「あんた、どこにいるのよ？ さっさと出てきて、神さまにお供物とお燈明を上げなさいよ。牛を繋ぐ杭なら、牛小屋に置いてあるから、はやく打ちこんでよ、ジャージーの雌牛を繋ぐんだからね」
モーティーは自分の耳が信じられなかった。かれはずっと座りこんで頭を抱えたまま、ぼつとしていたのだ。水煙管を持ったまま、戸口に急いだ。見るとマンガリーがジャージー牛を引いて牛小屋に向かっている。

マンガリーがジャージー牛を引いてきたのを見て、モーティーはこれまでで一番嬉しかった。その先がどうなるうかと考えるまえに、目から涙が

流れていた。マンガリーに見られたら、「それでも男かね」とやられかねない。

(一九九六年発表)

解説 Ⅱこの作品を収める短編集との出遭い、短編集が目指すところ、

この作品の世界への訳者による案内

(注記) ここでヒンディー語をローマ字に転写するには、*Kyoto-*

*Harvard*方式により、長母音、反り舌音を大文字で、鼻音化音

をMで、そして硬口蓋歯茎摩擦音(日本語のシュ)をzで記した。

一・この作品を収める短編集との出遭い

二〇〇七年の夏だったと思う。わたしはバナールスでの調査を終えて、いつものように「さようなら、バナールス」の心算でバナールス・ヒンドゥー大学の中心にあるナワ・ヴィシュヴナート・マンデイルに行った。寺の名を訳すと、新・宇宙神・寺院となる。ビルラー財閥が建立・寄進し、高塔が天空に聳えるその寺は、ビルラー・マンデイル(ビルラー財閥の寺)として知られ親しまれている。門前に花屋・土産物屋などが並ぶなかに、本屋が一軒あって、神話・伝説書や聖地案内書とともに現代文学作品も置いているので、必ず寄る。店に入ると、*katha meM gaMv* 『短編小説のなかの村』と題された三百ページほどのヒンディー語の本が目にとまった(メーラト市のサンワード社、二〇〇六)。手にとってパラパラめくってすぐを買うことにした。それには二つの理由がある。一つは、研究会仲間の松木園久子さんが英語小説のなかの村を主題に学位論文を出して受理されたことを想い出したこと、もう一つは本のトビラに題、編者と並んで助言者としてマネージャー・パーンデーの名があることだ。パーンデー君は、一九六三年にバナールス・ヒンドゥー大学に留学したときのクラス・メイトで、二〇〇七年にはデリーのジャワーハルラール・ネルー大学ヒンディー科教授であった。パーンデー君は、作品を生むうえで助言し、選集を編むことにも助言したらしい。

わたしがよくすることだが、この本も序文と目次に目を通しただけで、廊下に積んでおいた。それを二〇〇九年の暮れに机に持ってきたのには、わけがある。ある人に松木園さんを紹介することになり、彼女が学位論文を一般向きに書きなおした『英語小説にみる「村のなかのインド」』（大阪大学出版会、二〇〇八）を取りだした。そのとき、『「ヒンディー」短編小説のなかの村』所収作品を訳せば、その本のアドヴァイザーたるパーンデー君と松木園さんへのお礼になると思った。そこで何編かをざっと読むうちに、テーマと文章の両面から惹かれたこの短編“*muTTI men gAMv*”（短編集の八七―九四ページ所収）を訳すことにした。この題を直訳すると「村は掌中に」となるが、作品の流れを参酌して訳すと「村は全部わしのもの」とばかりに振るまう村長の発想を象徴しているようだ。

二・短編集が目指すところ

冒頭の九ページにわたる「背景」を、マネーシヤル・パーンデーは「インドには二つのインドがある。一つは豊かな十パーセントの人の国、こう一つのインドは貧しい九十パーセントの国。二番目のインドの七二パーセントは、インドの村に住んでいる」と書きはじめている。文学作品においても、村とそこで暮らす貧しい人たちを中心に据えようという呼びかけだ。

編者の言葉「なぜこの選集を」でスバーシュチャンドラ・クシュワールは、インドのグローバル化がはじまった一九九四年から、ヒンドゥー至上主義政権の崩壊が迫った二〇〇三年までの作品を発表順に掲載して、このような時代と社会で村が文学でどのように描かれてきたかを一九の短編で示す、と編集の意図を述べている。

選集の副題は、*bhAratiya gAMvoM kA badaltA yathArth*（インドの村で変動しつつある現実）となっている。編者と助言者の意図を端的に示している。

三・この作品の世界への訳者による案内

主人公夫妻の名は、妻がマンダグリー。吉兆のあるという意味の形容詞で

ある。夫は、モーテイー。象牙の意の名詞で、独立インドの初代首相の父の個人名がモーテイーラール（象牙のように美しい）であった。

作中での夫妻は、その名とかけ離れた暮らしを強いられている。

舞台はヒマーチャル・プラデーシュ州の一山村である。作者の出身村と重なる部分が多いのだろう。描写は日常生活の細部まで行きわたっていて、読者にマンガリーとモーテイー夫妻、村長の一挙手一投足を見せてくれる。文章は徹底して、その場の中心人物の視点に添うている。そこでは、作者による地の文と中心人物の思考・科白が重なって感じられる。

物語は、ジャージ種の雌牛を政府からの助成で飼えることになったマンガリーの期待からはじまり、親切面した村長が雌牛をモーテイーから奪おうとしたものの、気の強いマンガリーに取りかえされるところで終わる。

長い歴史のなかでハリジャン（アンタツチャブル、不可触賤民）として搾取され蔑まれていた人たちが、独立インドの憲法によって「保護されるべく」指定「された」カースト民」として種々の保護を受けているなかで、有力者が狡猾に甘い汁を吸うさまがこの作品に描かれている。

グローバル化とヒンドゥー至上主義のなかで、村の人たちの暮らしが文学にどのように描かれているかと、編者と助言者は問うた。ここに訳出した一編は、その問いが有意義であり、かつその問いに応じる作品が生まれつつあることを示している。

農村で抑圧され搾取されている人々を描いたヒンディー文学の作品の例として、筆者はかつて三つの小説を「暮らしの場から生まれる文学」（『国際交流』五八「特集 インド世界は今」―一九九二年六月、五二―五四ページ）と題して紹介した。三つの小説の見出しを筆者は、実現しなかった小作農の願い、生きる場のない「不可触民」、狂気の宗教抗争とした。ここに訳出した「村は全部わしのもの」をその紹介文に加えるとしたら、その見出しは、夢は夢のままの「不可触民」としようか？ あるいは十八年まえと同じに、生きる場のない「不可触民」としようか？ このところ現代文学をあまり読んでいない筆者だが、昔からの課題・問題がインド社会に山積していること、そのさまを描く最近の作品で眼差しが鋭くなってきていることを感じる。